

暖地型牧草地の晩秋における放牧期間の延長について

大 脇 精 一・久 松 常 男
(宮崎県総合農業試験場)

OWAKI, S. and HISAMATSU, T.

The Extension of Autumn Grazing in Dallis grass Pasture.

第37号で報告したとおり暖地型牧草地における乳用子牛の周年育成は可能で、その技術目標もほぼ妥当であることが認められた。しかし、終牧は11月5日で想定より約20日短かったので追試験を行い暖地型牧草地における晩秋の放牧期間延長の可能性、飼料成分の変化、育成牛の発育について検討した。

試 験 の 方 法

供試草地 ダリス草地 230 a (実証組立試験時
採草・放牧兼用草地)
最終刈取 8月21日
刈取後の追肥 40kg/10a (N15. P2. K10)
供試牛 ホル種雌育成牛 15頭 (4月からの放牧牛,
10月末14ヵ月令)
10月27日～11月26日 10頭
11月27日以降 15頭
放牧の方法 移動式電牧柵を使用した小牧区 (15～20
a) で昼夜放牧, 濃厚飼料無給与

試験結果および考察

植生と現存量 11月2日と25日の2回、転牧前の地点で調査した。ダリスの被度と草丈は、それぞれ前期が92%、40cm、後期が90%、55cmで、それに自生したラジノクローバが前期25%、後期30%の被度であった。

10a当りの現存量(風乾重)は前期が272kg、後期が291kgで実証試験の想定収量200～240kgより50～70kg多かった。

ASPにするためのダリスの最終刈取の時期は、刈取時から10月末までの積算気温がおおよそ1,400℃以上になる時期であれば想定収量は十分期待できると推察された。

飼料成分 収量調査時における牧草の組成を表に示した。前期と後期では、可溶無窒素物のほかは前期が若干高いが著しい飼料成分の低下は認められなかった。なお、夏季(Ⅱ47)の放牧利用時にくらべると、おおよそ粗蛋白質は40%少く、可溶無窒素物で20%多いほかは大きな差はみられなかった。

草地の利用 終牧は12月7日で40日間の放牧延長ができ、その間の放牧頭数は10a当り延20頭(11.7CD)であった。なお、採食率は71.3%で通常の放牧時より約20%高かった。

育成牛の増体 供試牛の試験期間中のDGは、10月27日入牧牛888g、11月26日入牧牛850gで増体は極めて良好であった。しかし、試験初期における増体が末期よりも高かったが、これは試験開始時の放牧地における採食量の不足状態が影響しているものと考えられた。

以上のことからダリス草地における晩秋の放牧期間の延長は可能で、しかも良好な増体とすることを確認した。

時 期	組 成 (風乾物中 %)						備 考
	水 分	粗蛋白質	粗 脂 肪	可 溶 無 窒 素 物	粗 繊 維	粗 灰 分	
50.11.2	4.9	9.4	4.2	44.2	27.2	10.1	
11.25	5.0	8.7	4.0	47.0	25.9	9.4	
参考 47.8.28	9.0	14.9	3.9	37.5	25.1	9.6	放牧利用時